

ドラマトゥルク・ノート「劇団ティクバ+循環プロジェクト」の経緯について
中島那奈子

2008年に始まったこの日独国際ダンス・プロジェクト「劇団ティクバ+循環プロジェクト」は、ドイツ・ベルリンで1990年から公演を行う劇団ティクバ、NPOダンスボックスの大谷磯さんが2007年に立ち上げ砂連尾理さんがダンスのナビゲーターとして関わっていた日本の循環プロジェクト、そして当時ベルリン自由大学で他者論や障害学の視点を取り入れて踊りと老いの研究を行っていたドラマトゥルクの私自身が出会った時点から、始まります。ベルリンに一年研修に来ていた砂連尾理さんを振付家に立ち上げたこの国際プロジェクトは、発足当初、大学や劇場との共同制作も十分な体制ではなく、また日独二つの劇場の運営趣旨の違いや、ダンス文化、言葉の違いが、日々の具体的な問題として跳ね返ってきました。また、障がいという条件をダンスで考えることが、個人や団体での共同制作の立場を複雑にしていくことも明らかになってきました。「障がい」を持たないとされるものは、「障がい」を持つとされるものへの、社会的な優位性をもってしまいます。しかし、「障がい」を持つものが「障がい」を持たないものに責任を任せ、指導権をゆだねる関係が長く続く場合、それは弱い側が強い側を吸収する別のアンバランスな関係となってしまうことも、リハーサルや作品制作のプロセスで明らかになってきました。それはまた、「障がい」と「健常」の関係だけでなく、「日本」や「ドイツ」という国や文化の力の違いや、劇場周辺の助成制度の違い、使われる言葉の力関係や感じ方の不均衡さへと、問題は広がっていくのです。一方が他方の文化を吸収してしまうことなしに、お互いの価値観を循環させていくこと、それはお互いの感じ方を相手に押し付けずに、作品制作の中での対話の場を開くことでした。

別の文化圏に属する人と、インターカルチュラルに働くということは、誤解や困難とともに、お互いの価値や感じ方を、バランスをはかりながら、循環させていくことと言えるかもしれません。「劇団ティクバ+循環プロジェクト」は、異なる文化圏のそれぞれの受容モデルを作品の中に組み込んでいけるよう、当初から三段階に渡る制作・上演のプロセスを計画していました。まず、発足1年後にベルリンでショーイングを行い、そしてその後、神戸での上演を実現した後に、最後ベルリンで公演を行う。この3段階のプロセスを辿ることで、上演が行われる一方の観客にあわせた作品を作るのではなく、双方の制度や社

会のあり方、人々の感じ方を、作品に組み込んでいけるのではないかと考えたからです。

ベルリンでの半年の準備期間をへて、神戸から招いた福角宣弘さん福角幸子さんら3人の循環プロジェクトのメンバーと制作の横堀ふみさん、劇団ティクバのカロル・ゴレビオウスキさんら4人を加えたりハーサルを行い、ベルリンの劇場F40スタジオで2009年10月にショーイングを行いました。このショーイングは、通常ダンスの観客が少ない劇団ティクバのスタジオが満員になる盛況で、また障がい者の劇団と他の演劇団体とが区別されるドイツの劇場シーンにおいて、劇団ティクバの作品を通常見ないベルリンのダンス関係者からも大きな反響を呼びました。ベルリンでのショーイングの後、2年の準備期間をへて、2011年3月Art Theater dB神戸で、「劇団ティクバ+循環プロジェクト」の第二部にあたる日本での公演を行いました。劇団ティクバから新しく加わったゲルト・ハルトマンさんニコ・アルトマンさんらメンバー4人が来日し、日本側からも専門的なダンス訓練を受けた新メンバーの西岡樹里さんや音楽の西川文章さん、照明の三浦あさ子さん、舞台監督の大田和司さん、インタラクティブ・メディアを考案する望月茂徳さん目次護さん椎橋怜奈さんチームを加えてのりハーサルをへて、滋賀と神戸での公演を行い、盛況のうちに幕を閉じました。

2012年は、パフォーマーに星野文紀さんを迎え、このプロジェクトのテーマに関連したダンスシンポジウムと、プロジェクトの3部にあたるベルリンでの本公演を行いました。ベルリン自由大学の主催で行われた国際ダンスシンポジウム「踊りと老い」（6月28-30日、Uferstudioにて）の中で、2日目夜に行った、「劇団ティクバ+循環プロジェクト」のショーイングでは、ダンスや障害学の研究者、ディスアビリティ・アーティストから多くの関心を集め、また3日目に行った日独双方のメンバーによるラウンドテーブルでも、老いた身体と障がいのある身体について、このプロジェクトを通じた経験から討議がなされました。このシンポジウムの詳しい報告は、ダンス+のサイト (<http://www.danceplusmag.com>) をご参照下さい。

シンポジウムが開催された一週間後、ベルリン・クロイツベルク地区にある劇団ティクバの本拠地F40で、7月5-7日に本公演が行われました。私自身は3月から、砂連尾理さんを始め他のメンバーは2週間前から順々にベルリン入りし、F40劇場でのりハーサルを進めました。コンパクトなF40の劇場ス

ペースでは、パフォーマーと観客を隔てる虚構空間を作り上げ演劇的な幻想で楽しませるのではなく、取り払ったむき出しの白壁を前に、劇場空間と日常の空間をクリティカルに繋いでいくことを試みました。ダンスが出来るとはいったいどういうことで、ダンサーとはいったいどのような人なのか、そして異なった背景の他者と対話することでそれをどう変えていくことが出来るのか——そのような問いかけは、歩くことをダンス作品として初めて提示したポストモダンダンスへのオマージュとも言える冒頭の部分を始めとして、構成の色々な部分で試みられています。シンプルにコンセプトを表した2009年の構成から比べると、神戸公演を経て、プロジェクトの構成は複雑化しています。今回のベルリン公演では、神戸で始まった新しい試みに加えて、メンバーによる即興を発展させながら、主に一対一という他者との対話を交差させ立体化していくことを試みました。その定点を持たない対話の交錯が一つの頂点に達する時、それぞれのメンバーは突如歩みを早めて走り出し、外の空間への扉が開かれています。ベルリン公演1日目、公演中に劇場の天窓が開いた瞬間、そこから突然の雨が舞台へと降り込んできました。3日間の公演は好評のうちに幕を閉じ、ダンスシンポジウムの参加者に加えて、劇団テイクバの他のメンバーやその家族を中心とする観客からも大きな反響がありました。芸術家による芸術作品なのか社会福祉やセラピーとしてのプロジェクトなのかという枠を超え、このプロジェクトはこれまで見落とされてきたものは何であったか、見ている人に問いかけようとしているのです。

私が2004年に、ニューヨークで始めたダンス・ドラマトゥルクとしての仕事は、ダンスの専門知識を実際の現場に還元し、また現場から研究や批評へのフィードバックを可能にする、新たな可能性をダンスで模索するものです。当初は、実験的なニューヨークダウントアウンダンスの分野でのドラマトゥルクとして、ダンサーであるべき身体を実験し、新しいダンスの感じ方をどう作品化していくかを試みていました。しかし、その作品作りの中で、アートとしてのダンスを作り出す制度やダンスマーケットのあり方に疑問を抱くようになりました。人気のある出演者の作品、チケットの売れる作品が、面白く意義のあるアート作品となって観客に受容されること、それは資本主義的競争社会の論理にのっかった、ダンスの感じ方です。そのダンスの一大マーケットから離れてベルリンに移った後は、従来ダンサーではなかった人々をダンサーとするプロジェクトにも視野を広げるようになってきました。日本におけるドラマトゥ

ルクの役割は、演劇の現場で導入されたばかりで、ダンスの分野では、まだ認識が広まっているとは言いがたいでしょう。ただ、異なる立場のものがお互いの価値観を循環していく際には、双方の関係性の中にバランスを見定めることが重要になります。この「劇団ティクバ+循環プロジェクト」の様々なレベルで生じる関係性にバランスを見つけること、それがこのプロジェクトで私がダンス・ドラマトゥルクとして担っている大きな役割の一つだと考えています。

この「劇団ティクバ+循環プロジェクト」は、振付家やダンサー、ドラマトゥルク、デザイナーそれぞれが意見を交換しながら、同等の立場で作品を作っていけるような、新しい作り方を目指してきました。「障がい」や「健常」、「日本」や「ドイツ」、「パフォーマー」や「観客」、「劇場」や「学校」といった間の境界を越える可能性がここでは試され、そのタイトルも完結した個人の作品とするのではなく、完結しない進行中の状態を暗示する「プロジェクト」となりました。この名称にはまた、これまで日独双方で行われてきた二つの団体の歴史を繋ぎながら、日本側の「循環プロジェクト」で模索された価値の循環を促していく意味も受け継がれています。これまでのダンサーやダンス作品のあり方、そして芸術作品という考えに、この「劇団ティクバ+循環プロジェクト」は問題を投げかけながら、ダンスの新しい感じ方、新しい文脈を見つけ出すことを目指しています。